

パウロはアテネの町にやってきました。アテネは世界でも最も古い都市の一つで3400年にわたる歴史を誇っています。ソクラテス、プラトン、アリストテレスなど、本は読んでいなくてもその名前だけは聞いたことのある偉大な哲学者たちの精神的な遺産が蓄積されてきた都市で、芸術や学問、哲学がこの地で受け継がれてきました。家の仕事は奴隷に任せ、哲学や学問の議論を町の広場でする人々が多くいたとも言われています。またアテネは多神教の町で、自然崇拝を基にした神々の像が町のあちこちにおかれていました。パウロはこの町に一人に着き、シラスとテモテの到着を待っていた。パウロがこの町を見て回っていると、至る所に偶像があり、パウロは憤慨したというのです。

パウロはこれまで通り、ユダヤ人の会堂でキリストを宣べ伝えると同時に、広場で居合わせた人々と毎日論じ合ったのです。広場というのは、ヨーロッパの古くからの町でよく見かける、町の中心に位置し、人々が行きかい、交流する場所です。そこでパウロは行きかう人々にキリストの福音を語り、論じ合ったというのです。

日本ではクリスチャン人口は全人口の1パーセントに満たない、と言われます。つまり百人の中に一人クリスチャンがいるかいないか、ということで、この国に住んでいる99パーセントの人々にとってキリスト教とはとりあえず無縁に生きている、ということです。例えば毎週日曜日に教会に行く、ということひとつとっても多くの人々にとっては異質なことです。不思議なことです。自分たちの日常の習慣にない行動だからです。どうして毎週教会に行かなければならないのか、なぜ毎週神を礼拝しなければならないのか。素朴な、かつ深い問いに、当然わたしたちは囲まれている。言ってみれば、パウロは自分の方からその問いの中に、疑問の中に入っていき、広場で語り合ったということです。これは、簡単なことではない。パウロといえども、無謀に過ぎると思ったかもしれない。しかし、パウロはアテネの町の偶像を見て憤慨した、とあった。それは哲学や学問、という人間の知恵や力ですすめていくことが盛んなこの町で、人間の手になる偶像が盛んに拝まれている様子を見て、無謀であろうが何であろうがパウロはこの町で神を宣べ伝えねば、と強く思ったということなのではないでしょうか。

町の広場でパウロと論じ合っていた人々はパウロのことを「このおしゃべりは何が言いたいのだろう」と言ったり、「あいつは外国の神々を宣伝したいんだろう」と言ったりしていました。外国の神々とアテネの人が言ったのには理由があります。パウロの話の中に「イエス」という言葉と「復活」という言葉がよく出てくる。だからこの男はイエスという神と復活・アナスタシスという女神の話をしているのだと、思ったのです。それほどにアテネの人々はいろいろな神さまに取り囲まれていたのです。人々はパウロからめずらしい話、新しい教えを聞かせてもらいたいと、パウロをアレオパゴス、アレスの丘、という場所へ連れて行ったのです。アテネの人々は新しい話を聞きたい、新し物好きだった、のです。

パウロはアレオパゴスの真ん中に立って語りはじめます。これは今までのパウロの説教とは違います。ユダヤ人相手でもなければ、旧約聖書を知っている人たちでもない。そもそも聖書の神などに関心のない人たちです。哲学や学問が好きで、新しいものや珍しいものが好きで、偶像が大好きな人たちです。キリスト教とどこに接点があるのか、まるで分らない人たちです。しかしここで主イエス・キリストの神を語らねばならない、アレオパゴスの説教はその思いから語られていきます。この説教の意味をくみ取りながら、かみ砕き、説明も加えながら読み進んでいきます。

「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなた方が宗教心の篤い方々だとわたしは見ています。道を歩きながら、あなた方の拝むものを見ているうちに「知られざる神に」と刻まれている祭壇があるのを見つけたからです。」知られていない神にと刻んであるということは、自分たちの知らない神さまもいるだろうから、その神さまのために、ということでしょう。いろんな神さまを拝み、まったく知らない神も拝む。それなら、わたしはそのあなた方の知らない神のことをお伝えしたいと思います。

「世界とその中のすべてのものを創造された神、天と地の主（あるじ）であるこの神は、人間の手で作った神殿などにはお住みになりません。」神が世界を創られたのです。それなのに人間は自分の手で神を作りたがる。そして自分で作った神を自分の手の内にしまい込もうとする。「また何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてを与えてくださるのは、この神だからです。」神がこの世界を創り、神がすべての人に命を与えてくださった、この事実に向けてください。「神は一人の人から全人類を創り出し、大地の全面に住まわせ、秩序ある時を定め、住まいの境をお定めになりました。」民族とか、国とか、とい

う以前に、神は一人を創造し、人類は広がっていった。ということは、我々ほどの民族の民だとか、どこの国の民だという以前に、神によってつくられた人間なのだ、パウロはそういっているのです。わたしたちは互いに違いに目を留めようとする。わたしはユダヤ人だ、ギリシア人だ、アテネの人間だ。男だ、女だ。だが、それ以前に神によって創造された人間だ、ということを知らねばならない。わたしは日本人である前に、ユダヤ人である前に、神に創られた一人の人間。「これは人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見出すことができるようにということなのです。」神が人間を創造したのは、人が神を求めるためです。神が人間に語りかけている、その神を人間が求めるのです。神が人間を創造されたのは、人間が手探りであっても神を求め、神の恵みに出会い、神と共に歩むためなのです。わたしたちの人生とは、そのような明確な目的を持っているのです。「実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。」

神はわたしたちを創られた。だから神はわたしたちが神と向き合い、神を求め、神の言葉を聞いて生きることを深く深く望んでいる。この神はわたしたちから遠く離れた神ではない。「皆さんのうちのある詩人たちも、『我らは神の中に生き、動き、存在する。』」とあります。ある詩人とはだれのことなのか、よくわかりません。しかし大事なことは、我らは神の中に生き、動き、存在するということです。わたしたちが神を理解し、把握し、わたしたちが神を捉えるのではないのです。わたしたちが神の中にすでに生かされているのです。先週の説教で申し上げたこと「わたしたちの主キリスト・イエスの中にある神の愛」という言葉を思い起こしてほしいのです。わたしたちはすでにキリスト・イエスの中におかれている、キリストのまことの中にある、それが神の愛だ、というあの言葉です。

ここでパウロが詩人の言葉を引用していっていることは、まったく同じ。パウロはローマ書でも、ここでも同じことを言っている。

パウロがアテネの人々に語るのは、神はあなた方の手によって作られるものではない。作ることができるはずもない。神があなたの創造主だ。あなたは神の中に生き、動き存在しているのだ、だからこそあなたはその神を求めていかななくてはならない。その御心を求め、その神に聞き従っていく。そういう転換が必要だ。

そしてパウロは最後に、神は無知な時代を大目に見てくださっていた。忍耐してこられた。だが、神の定め給う時に、裁きと、復活による救いの成就の時が来る。だから、悔い改めて、自分の神を拝むのではなく、あなたの創造主の

中で生きなさい、と語るのです。

パウロの話聞いていた人々は、パウロが復活という話をする、とある人々は嘲笑い、ある人たちは、その話はいずれまた、と言ったと記されています。

この光景は、わたしたちにはよくわかる光景ではないでしょうか。

アテネの町の人々、それは驚くほどに、現代のわたしたちにつながるものを感じるのです。アテネの人々は自分たちが作り出すものに熱心だった。それが学問であれ、芸術であれ、偶像であれ、自分たちの作り出すものの中で生きることに関心、自分たちが創られたものであることを忘れていた。作られたもの、ということも、神がキリストを復活させたまう、ということも、わたしたちの理性で受けとめきれることではない。アテネの人たちはだからこそ嘲笑った。だが人間は人間の作り出すものによっては救われない。神の中に生き、動き、存在する、その恵みの事実を受ける以外にまことの救いはない。パウロはアレオパゴスの真ん中で、そのことを語るのです。わたしたちも、現代のアレオパゴスで語るべきを語るものとされていきたい。

パウロのアテネ伝道はうまくいかなかったのではないか、という人がいる。確かに、聞いている人がみな納得し、すぐさま信仰に入ることがうまくいくことならそうかもしれない。しかし、自分のたちの力ですべてを作り上げ、自分たちの手になる偶像を拜む人間の中で福音を語ることは、衝突なのです。それも正面衝突。それを上手に避けて、耳障りのいい話をする、というわけにはいかない。

パウロのアレオパゴスの説教は、今もわたしたちに、語りかける。あなたは神を捉えようとして、自分流の神と自分流につきあっているのではないか。創造者なる神を知り、創られた自分を知り、神の中に生きている自分を生きなさい。信仰へと導かれるものがそこから必ず生まれていく、聖書はそのことをわたしたちに告げているのです。